

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.33-44)

<調査研究速報 特集>

水の神と火の神

— 割って入った神の出現による社会の変化

嘉幡茂 (京都外国語大学)、
フリエタ M. =ロペス J. (メキシコ国立自治大学)、
荒木昂大 (東北大学)、
村上達也 (テュレーン大学)

Dios del agua y dios del fuego: transformación social por el dios recién llegado

Shigeru Kabata (Kyoto University of Foreign Studies)
Julieta M. López J. (Universidad Nacional de Autónoma de México)
Koudai Araki (Tohoku University)
Tatsuya Murakami (Tulane University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua
Japan Society for Studies of Ancient America

水の神と火の神

一割って入った神の出現による社会の変化一

嘉幡茂（京都外国語大学）

フリエタ M.=ロペス J.（メキシコ国立自治大学）

荒木昂大（東北大学）

村上達也（テュレーン大学）

1. はじめに

村上と嘉幡を共同団長とするトラランカレカ考古学プロジェクト（Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla；以下 PATP）は、メキシコ中央高原（図1）の形成期終末期（前100～後250年）から古典期前期（後250～450年）における社会変動の解明と歴史復元を主要目的の一つとして、2012年から現在まで実施されてきた。先行研究では、形成期中期（前800～前500年）の半ばごろに、クイクイルコ（Cuicuilco）、トラランカレカ（Tlalancaleca）、ショチテカトル（Xochitécatl）、アマルカン（Amalucan）、トティメワカン（Totimehuacan）などで第一世代の都市が形成され始め〔本号所収の村上他 2019〕、これらは遅くとも紀元後250年ごろまでに衰退し、代わってテオティワカン（Teotihuacan）と Cholula が二大都市（第二世代の都市）として発展していったと解釈されている〔e.g., Cowgill 2015:38-60; García Cook 1973, 1981; Plunket and Uruñuela 2018:67-92〕。そして、第二世代の都市の発展を指標に、形成期から古典期へと社会が変動する時代と理解されている。変動の主要因は、紀元後70年ごろに起こったとされるポポカテペトル火山（Popocatepetl；標高5426m）の大噴火にあったと指摘されている。大噴火が引き起こした自然環境の劇的変化、社会の解体と人口変動、そして社会の再編が古典期という新しい時代を生み出した。

一方、筆者らの調査結果によって、この一連の社会変動についてより詳細に歴史復元を行うことが可能となった。かつて、トラランカレカ社会はテオティワカンの揺籃期（前150～後100年）の終わりにには既に衰退したと理解されてきた。しかし、テオティワカンの発展期である紀元後250年あるいは300年ごろまで存続していたことが判明した〔e.g., 嘉幡・村上 2015; 嘉幡 2019a:66-74; Murakami and Kabata 2019〕。つまり、トラランカレカ社会は自然災害による社会的混乱を克服し、さらに発展した珍しい事例であると言える。一方、プエブラ市に位置し噴火の影響を受けなかったアマルカンとトティメワカンは衰退する。

ここから、古典期社会への移行には、単純に自然環境の変化が主要因であったとは言えないことが理解できる。もちろん、ある社会はこれによって解体した（例えば、ティンパ〔Plunket and Uruñuela 1998〕）。また、別の社会は自然環境の変化とは異なった理由で衰退した。他方、一部の社会は違う道を歩み発展した。この移行期を理解するためには、議論の中心を自然環境の変化に起因する社会的混乱に、どのように対応しどのように

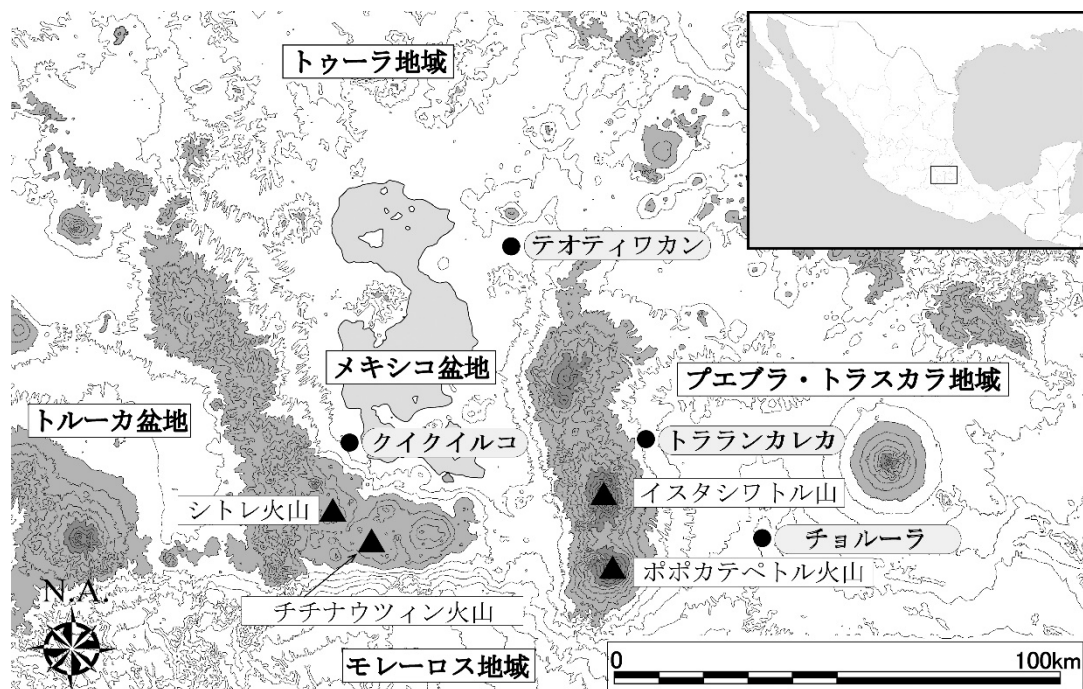


図1. メキシコ中央高原の地図

克服したのか、逆に対応したにもかかわらずなぜ衰退したのかに向かわせるべきであると筆者らは考えている。

先に指摘したように、先行研究では、ポポカテペトル火山の大噴火が社会変化の主要因であり、これによって古典期社会が始まったとの見方が主流であった。この背景には、古典期の幕開けをテオティワカンにおける国家の成立と同義であるとするバイアスが大きく関わっている〔嘉幡 2019a:29-39〕。メキシコ中央高原におけるテオティワカン国家の樹立までには、以下で述べるように、各地域で社会の構造変化が起っていた。しかし、形成期から古典期への移行期に関しては、考察の地理的範囲がメキシコ盆地内に狭められている。筆者らは、形成期から古典期の社会移行は、プエブラ・トラスカラ地域、トゥーラ地域、トルーカ盆地、モレーロス地域、そしてメキシコ盆地を包含するメキシコ中央高原全体における現象であったとの枠組みを設定し、このテーマを考察すべきであるとする。

本調査研究速報では、第一世代の都市の多くが衰退する中で、なぜトラランカレカは形成期から古典期の過渡期を生き抜いたのかについて、過去の調査結果を含め、2019年7月・8月に実施した発掘調査の成果を中心に論じたい。本号所収の村上他調査研究速報では「中規模統合システム」が中心テーマである。これと対比する目的を持ち、本稿では「大規模統合システム」の変化（社会背景とその要因）、なぜ必要であったのか（導入過程）、そして、具体的にどのように実践されたのか（考古学データとその解釈）について、形成期終末期の社会変動を考慮しながら議論していく。

2. トラランカレカにおける「大規模統合システム」の変化と社会背景：火の神の出現

形成期終末期から古典期前期にかけ、メキシコ中央高原では社会の再編を余儀なくされた。ポポカテペトル

火山（後 70 年ごろ；火山爆発指数 6）、チチナウツィン火山（Chichinautzin；標高 3430m；後 125 年ごろ；火山爆発指数 2）、シトレ火山（Xitle；標高 3100m；後 275 年ごろ；火山爆発指数 2）が噴火したためである。これらの噴火によって社会が不安定になり、特に噴火の被害を直接受けたメキシコ盆地南部とプエブラ・トラスカラ州西域の被災民は三つの安全圏へと向かう。一つは、従来から指摘されているメキシコ盆地北部、つまり後にテオティワカンで古代国家が出現した地域である。後の二つは、直接の被害を受けなかったトラランカレカと Cholula である。

ここで忘れてはならないのは、噴火の影響は、単にテオティワカンとトラランカレカと Cholula の三都市の発展によって収斂したのではないことである。ここに辿り着くまでには、①間接被害による社会再編と、②社会の構造変化を実質的に促した観念体系の見直しが行われており、その結果、古典期へと社会が移行したということである。

したがって、この二つの側面から収斂までの過程を考察する必要がある。まず、①近隣地域への物理的影響（間接被害）である。一連の火山の噴火の前まで、クイクイルコやトラランカレカそしてショチテカルを中心として地域間ネットワークが形成されていたが、噴火の影響でこれが麻痺した。特にクイクイルコの南に広がるモレロス州やゲレロ州との地域間ネットワークが分断されたと考えられる。これにより、従来機能していた地域間交換ネットワークは解体し、トラランカレカ、テオティワカン、Cholula を中心に再構築される動きとなった。重要なのは、噴火の影響を直接受けた地域（点）のみにおいてではなく、直接の被害圏外であった地域においても人口変動は波及し、社会再編の実施は面としての広がりを持っていたということである。

もう一つの観念体系の見直しとは、パラダイム・シフトを指す。

形成期社会と古典期社会は、一般的にはテオティワカンにおける初期国家の出現を代表例として、社会の階層化、集約農耕の発展、交易網の発達といった特徴によって区分される。同時に、この社会変化の中で、パラダイム・シフトが起こっていたことを忘れてはならない。一連の火山の噴火によって引き起こされた社会的混乱を契機とし、かつて信じられていた価値体系は刷新されねばならなかった [Plunket and Uruñuela 1998; 嘉幡 2019a:68-74]。

古代メソアメリカ文明では、世界は三層（天上界・地上界・地下界）から成り立ち、これらに住む神々や精霊や先祖と交信し、彼らからの超自然の力を得ることによって、地上界の平和が守られると信じた。この三層を連結する場所が、各地域にランドマークとして存在する山であり、その中でも水源を確保できる山が「水の山（*altépetl*）」として信仰の対象となった。この思想は、形成期中期以降、水源が存在する地点にピラミッド型建造物を建造することで物質化（*materialization*）されていった。つまり、ピラミッド型建造物は「水の山」のレプリカであり、各界の神々と交信する舞台として建造された [嘉幡他 2017; 嘉幡 2019b]。元々、「大規模統合システム」は社会の紐帯を強固にする目的で、「水の山」への信仰や物質化を基に実践されていた。

刷新せざるを得なくなった要素は、火の老神（*Huehuetéotl*；一連の噴火により徐々に制度化された）である。この割って入った神は、古典期（後 250～600 年）以降のメキシコ中央高原において、古代人の信仰の対象として重要な地位を築くことになる。

一連の噴火の前までは、「水の山」への信仰の実践とこれをピラミッド型建造物の建築を介して物質化する事業が、公共空間において最重要課題であった。しかし、神々は水や風や雨といった自然現象のみではなく、火にも宿ることを理解した。そして、時に地上界に壊滅的な破壊をもたらすことを知り畏れた。これが価値体系の刷新に繋がる。



図2. セロ・グランデ・ピラミッドの頂上に安置されていた火の老神の石製の狼煙台（トラランカレカ市博物館収蔵；74×69×43 cm）

メキシコ中央高原における火の老神の初出は、クイクイルコの土偶であると思われる。これらの土偶は紀元前 400 年から紀元後 200 年の間に製作されたと指摘されている [Matos Moctezuma 2002; cf. Plunket and Uruñuela 1998]。クイクイルコからは、存在感を示すポカテペトル火山やシトレ火山がよく見える。人々に誇示するかのようなこの自然景観が火の老神を誕生させる背景になったと推測できる。興味深いことに、トラランカレカ遺跡ではこの火の老神をモチーフにした遺物は、形成期終末期まで待たねばならなかった (図2)。トラランカレカ、テオティワカン、 Cholula の為政者らは、水の神と火の神を融合させる必要に迫られた。そして、観念体系の中で刷新される「水の山」を新ピラミッド型建造物として物質化することが、社会再編の具体策として急務であったと考えられる。

メキシコ中央高原における形成期から古典期社会への移行は、世界観の物質化を自然景観のみに頼るのではなく、より人工的に物質化する時代への過渡期として理解できると考える (3-2 参照)。この動きは、噴火 (火の老神の怒り) が引き起こした社会的混乱を収斂させるために、人間がより

積極的に神々の世界に介入し、現世に恩恵をもたらしたいという希求の現れだったのかもしれない [嘉幡 2019a:74]。

この希求が「大規模統合システム」の変化に繋がる。本稿における「大規模統合システム」の具体的な動きとは、自然環境の変化によって勃発した社会的混乱を収める目的で、水の神と火の神を融合させ、両者からの恩恵を獲得する舞台として新型ピラミッドを建造するプロジェクトを指す。三都市の為政者らは噴火による社会動乱の時代を生き残る戦略を、独自の方法で考案していったと筆者らは考える。結果、三都市のピラミッド型建造物の規模や形状や装飾は、大きく異なることになった [嘉幡 2019b]。

嘉幡 [2019a:70] は、これら三都市の為政者らが、彼らと神々、そして彼らと一般階層との関係をどのように把握し、どのように社会の再編を遂行したいのかに関して以下の仮説を提示した。

- ①それまでと同様に伝統的な神聖性を確保する戦略 (トラランカレカ)
- ②神聖性を刷新しこれと世俗性を併せ持つが一般階層とは距離を取る戦略 (テオティワカン)
- ③新たな神聖性を模索しこれを確保しつつも一般階層にとって身近な存在を目指す戦略 (Cholula)。

トラランカレカ社会は、テオティワカンや Cholula と異なり、既に形成期中期から発展していたため、「大規模統合システム」の原理が後二者と大きく異なる。一連の火山噴火の中から、トラランカレカの為政者らは、これまで存在していた「水の山」を再利用しながら、火の神をこれに融合させていった。しかし、後述するように、「大規模統合システム」は一朝一夕には完成しなかったと考えられる。

形成期終末期のトラランカレカ社会では、合計九カ所において建築複合が存在していた (図3)。この中から、

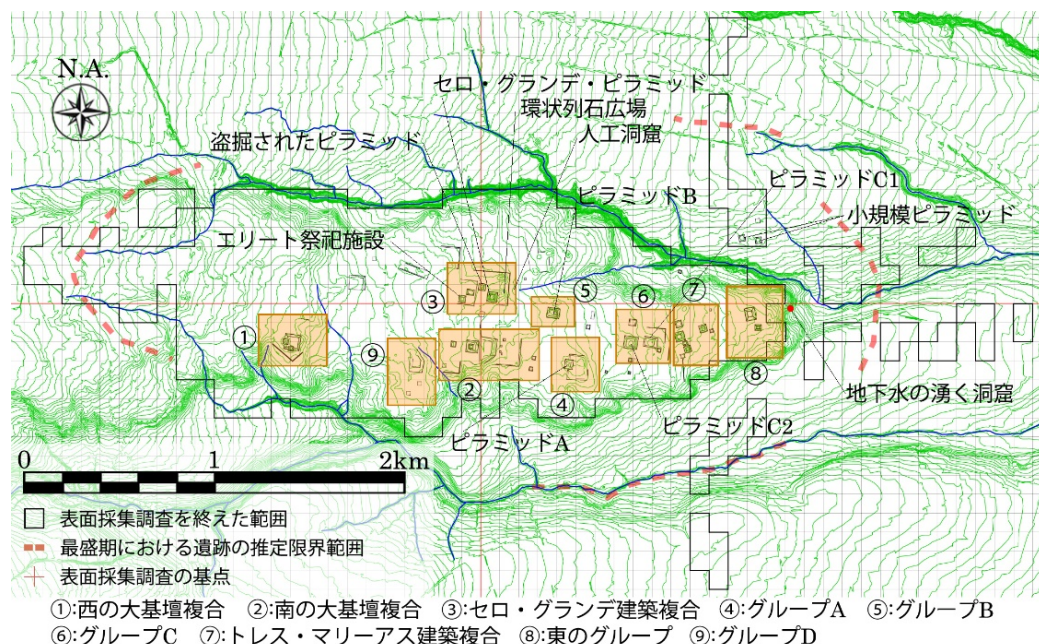


図3. トランカレカ遺跡中心部（各建築複合の名称と主要建造物の位置関係）

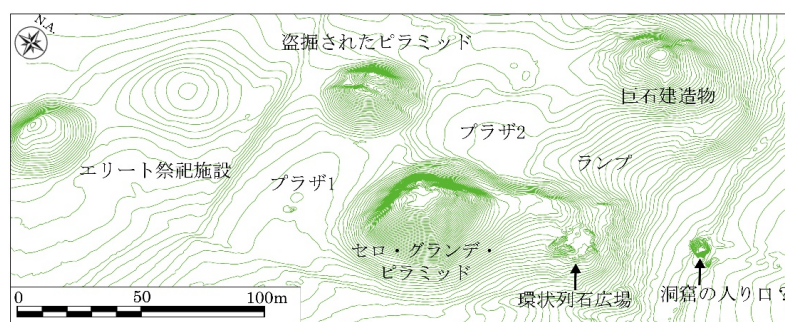


図4. セロ・グランデ建築複合を構成する建築物とその配置関係

「それまでと同様に伝統的な神聖性を確保する戦略」は、セロ・グランデ建築複合（図3の③、図4）において実施された。この場所で「大規模統合システム」が発動した理由は、天然の水源（地下界）が存在していたためである。年代の異なるいくつもの火砕流や溶岩流の堆積によって生成されたこの台地には、地中に水脈が存在している。水脈の方向と出口を基準に、セロ・グランデ建築複合を構成する建築物群は配置されたと考えられる。水脈の出口（図4の「洞窟の入り口？」）はセロ・グランデ建築複合から太陽を観測できる東側に、そして地下水脈の方向とセロ・グランデ建築複合は、あたかも地上界と地下界が重なるように設計されていたと考えられる。

3. セロ・グランデ・ピラミッドにおける「大規模統合システム」

3-1. タルー・タブレロ建築様式と火の神の関係

2016年7月 [Murakami and Kabata 2017:3-79] と2019年7月・8月にセロ・グランデ・ピラミッドで実施した発掘調査のデータから、このピラミッドの建築変遷史が少しずつ理解できるようになった。現在までのところ、トラランカレカ遺跡の中で最大規模を誇るこのピラミッドでは、少なくとも一度全面的な建て替えが行われたことが判明した。最終時期のピラミッド（推定 $55 \times 53 \times 17\text{m}$ ；この内部建造物に関しては後述）は、床面から採集された炭化物を用いた年代測定に基づき、紀元後200年から300年辺りまで機能していたことが分かった。さらに、南北の建築方位軸は、真北から東に4度21分6秒傾いていた。

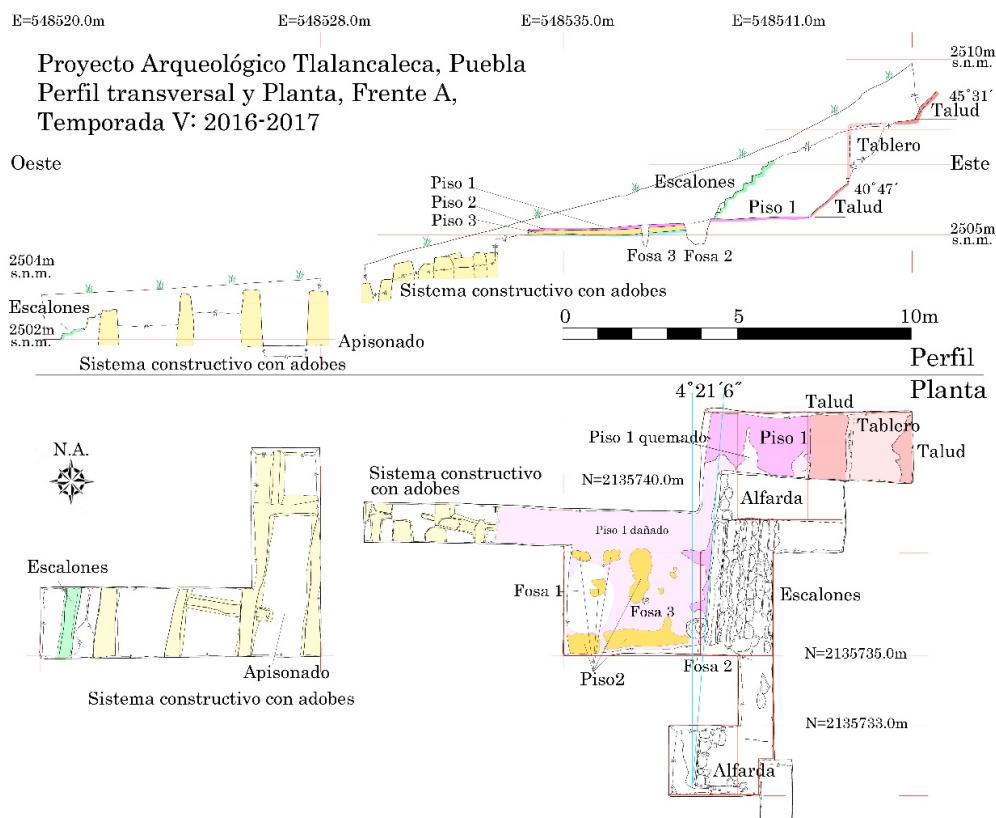


図5. セロ・グランデ・ピラミッドの西側正面部分の平面図と断面図 [Murakami and Kabata 2017, Figura 1-6 と Figura 1-7 を転用]

より興味深いのは、ピラミッドの西側正面部はタルー（斜壁；Talud）・タブレロ（垂直壁；Tablero）建築様式で築かれていたことである（図5）。この建築様式は、紀元後250年から300年にテオティワカンで大々的に採用され [e.g., Sugiyama and Cabrera Castro 2007]、その後、この国家の発展と共に多くの地域で利用されるに至る。研究者の間では、テオティワカンとの政治的な関係を示す物質文化であると理解されている。トラランカレカでは、セロ・グランデ・ピラミッドの他、トレス・マリーアス建築複合（図3の⑦）を構成する建造物 TM5 で同様の建築様式が採用されており、紀元後100年ごろに機能していた内部建造物でも同建築様式が使われていた可能性が高い [Murakami and Kabata 2017:263-310]。現在のところ、公共建造物へのタルー・タブレロ建築

様式の利用はこれが最も早い事例である。一方、ポポカテペトル火山の東麓に位置するテティンパ遺跡(Tetimpa)では、紀元前 50 年から紀元後 100 年の間に機能していた一般住居址で発見されており、これが最も古い事例と言える [Plunket and Uruñuela 1998]。この遺跡では、タルー・タブレロ建築様式の採用と共に、火山を崇める物質文化が増加しているため、タルー・タブレロ建築様式の出現は、ポポカテペトル火山、即ち火の神の誕生と関連していたと推測できる。また、セロ・グランデ・ピラミッドの頂上部からも火の老神の石製の狼煙台(図 2・図 6)が出土しており、この推測を補強する。トラランカレカ社会は、「水の山」としてのセロ・グランデ・ピラミッドに、火の神への偶像崇拜と、これと関連する可能性の高いタルー・タブレロ建築様式を採用することで、水の神と火の神を融合させていったと考えられる。



図 6. セロ・グランデ・ピラミッドの頂上部から出土した「火の老神」の石製の狼煙台
[南西から撮影；©Higinio Varilla]

ここで誤解の恐れを取り除いておきたい。それは、これが採用された建造物と火の神への信仰は、常に関連していたと結論付けられない点である。筆者らは、この建築様式の出現が、ここに描かれる壁画やレリーフに投影された政治的メッセージを強調する目的と密接な関係にあったことを指摘するものである。つまり、これが採用される前の時代の建造物においては、建造物自体の規模やその装飾物によって先のメッセージは伝えられていたが、地上から仰ぎ見る際、壁面の視覚効果をさらに高める努力の結果として、建築様式は改良されたものであると推測する [嘉幡 2019a:171-173]。換言すれば、トラランカレカにおけるタルー・タブレロ建築様式は、当初、単にメッセージを伝えるための効果的なキャンバスとして利用されており、それ自体にはメッセージ性は乏しかったのかもしれない。しかし、この建築様式の発明は、火の神へのメッセージ効果を高めるために、この形成期終末期に誕生したと考えられる。筆者らはここに、新型ピラミッド建造に向けた設計の改良を発見する。

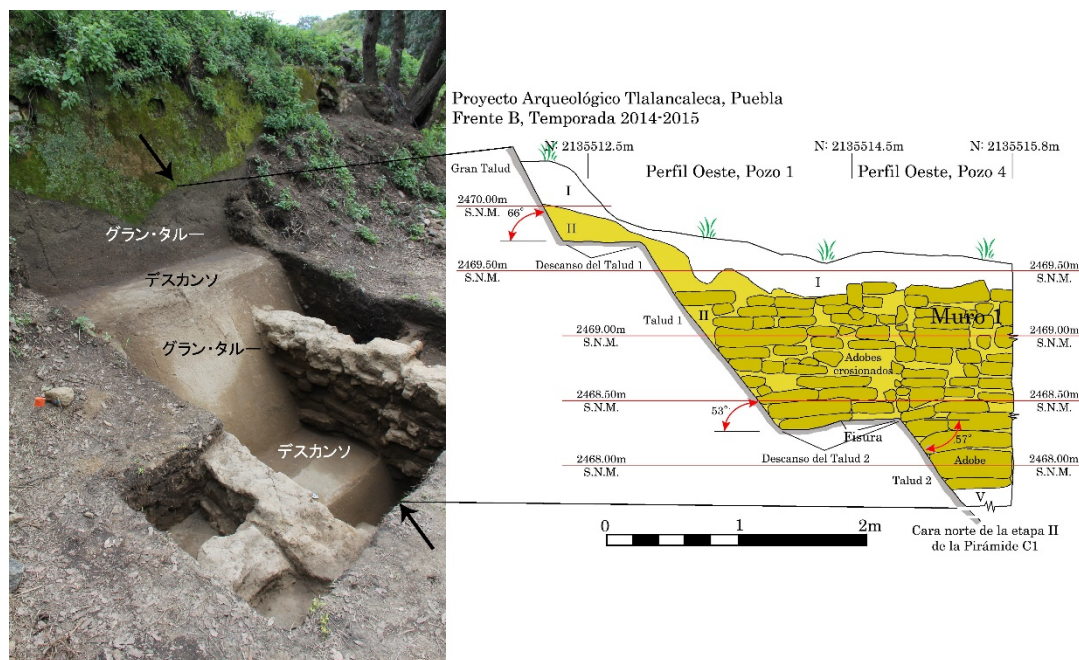


図7. グラン・タルーとデスカンソの一例【トラランカレカ遺跡ピラミッドC1】

3-2. セロ・グランデ・ピラミッドに認められる二面性

先にトラランカレカの為政者らは、「大規模統合システム」を「それまでと同様に伝統的な神聖性を確保」しながら実施したと指摘した。その痕跡はセロ・グランデ・ピラミッドの東側正面や内部建築構造に認められる。今後、さらにデータを補強しこの解釈を実証していく必要はないが、本節では現在までに得られたデータを基に、トラランカレカ社会全体を統合する上でピラミッドがどのような役割を果たしたのかについて議論する。

最終時期のセロ・グランデ・ピラミッドはすべての面にタルー・タブレロ建築様式が採用されてはならず、東側はグラン・タルー（大斜壁；Gran Talud）とデスカンソ（平坦面；Descanso）の繰り返して建造されていた（図7）。このピラミッドの南西側にはポポカテペトル火山が位置するため、タルー・タブレロ建築様式の採用は西面のみで事足りるがために、東面は簡略化とも言えるかもしれない（南面は未発掘であるため今後の調査が必要とされる）。しかし、セロ・グランデ・ピラミッドの東側と隣接する区域は、重要な建造物が存在している。それは、体積が 1m^3 以上の加工された巨礫によって規則的に配列され、直径が約15mに達する環状列石広場である（図4・図8）。発見当初、天体観測施設の可能性が高いと推測した【嘉幡他2014】。その理由は、広場の東側に50cmほど配列が途切れる隙間が存在し、この空間の両側には形状の類似する巨礫が配置されていること、そして、広場の中心地点を基点としてこれを視準すると、ラ・マリンチェ山（La Malinche；標高4420m）を臨め、この山の背後から昇る太陽を観測するものではなかったかの推測による。

2019年8月の調査では、この空間の機能や用途に関する重要なデータを得ることができなかったが、土器編年とC14年代測定の結果から、セロ・グランデ・ピラミッドとこの環状列石広場は同時代に機能していたものであったことが判明した。2016年の調査によって、床3（図5のPiso3）のレベルから下に約3mの地点で別の時期の床面（図5のApisonado）が発見されていたことにより、現在まで間接的に内部建造物の存在が認められてきた。今回の調査によって、新たにセロ・グランデ・ピラミッドの一つ古い時期の内部建造物の存在が確認さ

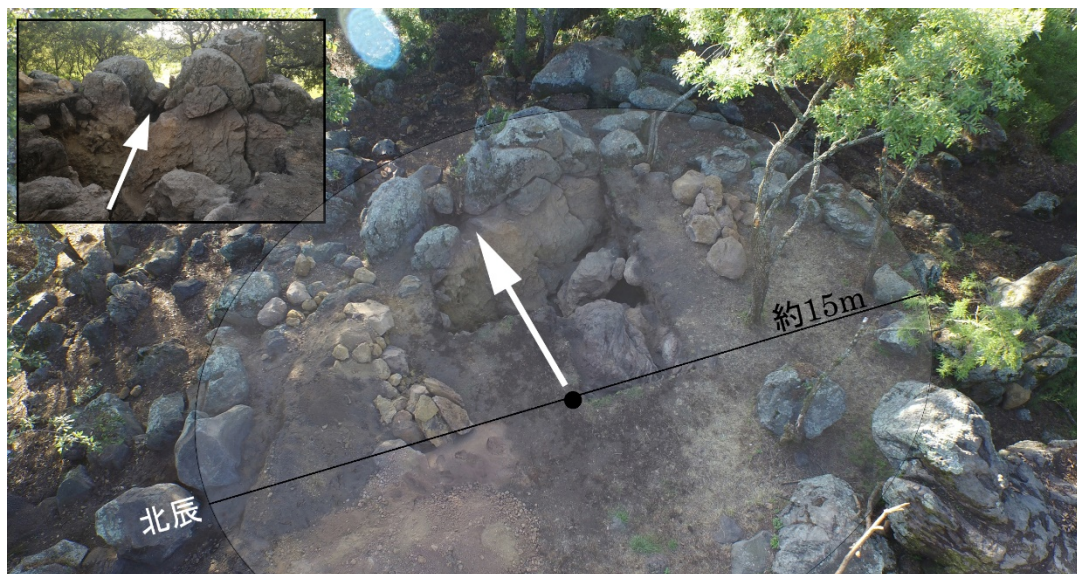


図8. 環状列石広場【ドローンによる上空9.2mからの撮影】

れた。グラン・タルーが床と接するレベルよりも1.3mほど掘り下げた地点から、別の床面が検出されたのである。さらにこの床面はタルーと接する。重要なのは、このタルーはトラランカレカで一般的な建築技法で建造されていない点である。タルーの立ち上がり部分は、斜めに成形された巨石が建造物の土台として機能しており

(図9)、さらに壁面の仕上げとして土壁が塗られていた。一方、この巨石を基礎としたタルーの東側、つまり環状列石広場方面には、成形された大量の巨石が無造作に出土する。内部建造物の機能当時、これらは恐らく規則性を持ち配列され、環状列石広場へと通じていたと考えられる。ここから、二つのことが言える。一つ目は、トラランカレカ社会で重要であったセロ・グランデ・ピラミッドは、テオティワカンや Cholula とは異なり、「水の山」のすべてを人工的にではなく、自然の地形を利用して加工しながら、物質化していたという点である(半物質化)。また、この東地区における空間利用

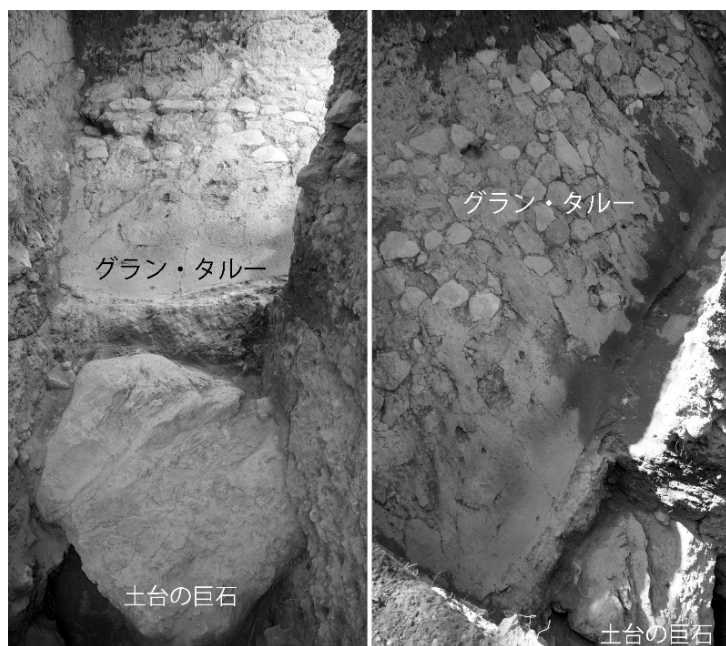


図9. グラン・タルーと巨石【左写真：東から撮影；右写真：南東から撮影】

は、最終時期のセロ・グランデ・ピラミッドにおいても継承された。

ここから、最終時期のセロ・グランデ・ピラミッドは二面性を備えていた点が見て取れる。ポポカテペトルを臨む西側はタルー・タブレロ建築様式で火の神を畏敬し、東側は大噴火以前の伝統を継承した半物質化様式で水の神を称えている。筆者らはここに、為政者らが水の神と火の神を融合させ、セロ・グランデ・ピラミッドにおいて「大規模統合システム」の実践プロジェクトを完工したと考える。

3-3. 為政者らの努力

この二面性を伴ったピラミッドの竣工には、為政者らの努力が生みだした技術革新が認められる点について触れておきたい。最終時期のセロ・グランデ・ピラミッドの内部は、部屋状補強土壁工法（Sistema de Cajón ; 図 10）を用い建造されている。この部屋状補強土壁工法は、大型建造物を建築する際に採用されるものである。建造物の内部はいくつもの壁で分割された構造を持っている。壁は日干しレンガで丁寧に組み立てられおり、各



図 10. 部屋状補強土壁工法の一例

壁の空間を土や石で埋め、これを繰り返すことによって、ピラミッドの体積を徐々に上方へと増していく。これによって、内部構造を安定させ建造物自体の崩壊を防ぎ、こもる湿気を一か所に集中させず各空間へと分散させている。この部屋状補強土壁工法は、トラランカレカでは少なくとも紀元後 100 年ごろから導入されるものである。それまでは、土と石を盛り土として、この隙間に日干しレンガとよく似た素材を乾燥する前に張り付けることで崩落を防ぐ工法が採られていた。

筆者らは、トラランカレカにおける部屋状補強土壁工法の発明は、地上界

の平和を守る目的で半物質化された「水と火の山（セロ・グランデ・ピラミッド）」の崩落を極力防ぐ目的と関連していたのではないかと推測している。このピラミッドの崩落は世界秩序の崩壊を暗示する。このため、ポポカテペトル火山の大噴火後、「大規模統合システム」の実践プロジェクトの一部として、この工法を開発する試行錯誤が行われていたのだと考えている。これを実証するために、現在筆者らは、部屋状補強土壁工法の正確な導入時期の把握、個体としての日干しレンガの耐久性、部屋の大きさやその集合体の違いによる強度の変化などの考古理科学分析を行っている。

4. おわりに

火の老神には、「年寄」や「古い」といった意味が伴う。雷鳴の神やトウモロコシの神などをはじめ、アステカの神々の名称には年齢区分は含まれない。その理由を次のように解釈することを読者の方々はどうに思われるだろうか。

噴火の恐怖を実感した古代人は、水と同時に火も重要だったにもかかわらず、形成期終末期まで信仰の対象として大規模に崇めることを怠った。ここから来る悔恨や、火の神への追従といった心の機微を読み解くのは、筆者らだけであろうか。

古代メソアメリカ文明において、神々の誕生は古代人の実体験や周りにある自然景観と無関係ではない。古代人の畏れや敬いの念が生み出したものであると考える。そして、新たな神々の登場を、どのように既存の神々と関連付け体系化させるのが為政者らの仕事であり、これを民衆にどのように示すのが社会の発展と関連していたと考える。

筆者らは、古典期社会のテオティワカンや Cholula では、時に金星として出現する羽毛の蛇神 (Quetzalcóatl) が重要な地位を占めることに注目している。形成期社会の物質文化には広く認められない神であるが、後の時代には支配の正統性と関連付けられ登場する。一方、水の神も火の老神もユビキタな存在である。しかし、三層の世界を常に行き来し、人間に何かを直接手渡す役割 (アステカ神話では人間は羽毛の蛇神の手助けにより誕生した) を担うのは、古典期社会では羽毛の蛇神のみであるという事実を重要視している。

トラランカレカ社会が衰退する一方で、テオティワカンと Cholula が発展し続けた背景には、常に新たな神々を「発見」し、それを従来の神々と関連させつつも独立した地位を確保させる観念体系の修正と発展にあったと推測している。さらに、この変化をピラミッド型建造物の増改築を介して物質化し直すと同時に、ここで儀礼を執行する為政者らの「責務」と密接に関連していたと推測している。

【謝辞】

2012年度以降PATPの発掘調査は、サン・マティアス・トラランカレカ村出身の作業員一同の協力の下実施されてきた。彼らのすべてに感謝申し上げたい。同時にこの場を借りて、現場を担う作業員の一人であり、2019年8月11日(日)に他界した Omar Pérez (オマール・ペレス) 氏に哀悼の誠を捧げたい。

A partir del 2012, el PATP se ha llevado a cabo con la colaboración de los trabajadores procedentes a la Comunidad San Matías Tlalancaleca, quisiéramos expresar un enorme agradecimiento a ellos. Encima de esto, quisiéramos dedicar nuestra sinceridad al joven Omar Pérez, quien falleció el domingo 11 de agosto de 2019.

サン・マティアス・トラランカレカ村の社会状況は、性別を問わず若者にとって不遇である。PATPの研究者メンバーは考古学調査を通して、このような不幸な状況を少しでも改善できればと考えている。

この意味においても、私たち執筆者そして研究者メンバーは、日本政府の科研費はメキシコ社会に貢献していると考え、深く感謝していることを明記させて頂きたい。2019年度のPATPは、JSPS科研費19H01347(令和元年度・4年度・基盤研究(B))「古代メキシコの都市形成史：世界の知的体系化と物質化」(研究代表者：嘉幡茂)、JSPS科研費18H05631(平成30年度・令和元年度・研究活動スタート支援)「地震多発国メキシコにおけるピラミッドの耐久性：建築資材の強度分析と内部構造の検証」(研究代表者：ロベス・フリエタ)を基に実施されている。

引用文献

Cowgill, George L.

2015 *Ancient Teotihuacan: Early Urbanism in Central Mexico*. Cambridge University Press, Cambridge.

García Cook, Ángel

1973 Algunos descubrimientos en Tlalancaleca, estado de Puebla. *Comunicaciones* 9:25-34.

- 1981 The Historical Importance of Tlaxcala in the Cultural Development of the Central Highlands. In *Handbook of Middle American Indians, Supplement 1: Archaeology*, edited by V.R. Bricker and J.A. Sabloff, pp. 244-276. University of Texas Press, Austin.

嘉幡茂

- 2019a 『テオティワカン—「神々の都」の誕生と衰退—』雄山閣。
 2019b 「なぜ古代人はピラミッドを造ったのか—メキシコ中央高原の古代都市に秘められた暗号」『古代アメリカの比較文明論: メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編）pp. 70-81、京都大学学術出版会。

嘉幡茂・村上達也

- 2015 「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元：『トラランカレカ考古学プロジェクト』の目的と調査動向」『古代文化』67(3):99-109。

嘉幡茂・村上達也・フリエタ マルガリータ＝ロペス フアレス

- 2017 「自然景観を取り込んだ古代都市：トラランカレカ」『古代文化』68(4):75-83。

嘉幡茂・村上達也・フリエタ マルガリータ＝ロペス フアレス・ホセ フアン＝チャベス バレンシア・福原弘識

- 2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて—トラランカレカ考古学プロジェクト—」『古代アメリカ』17:53-71。

Plunket, Patricia, and Gabriela Uruñuela

- 1998 Preclassic Household Patterns Preserved Under Volcanic Ash at Tetimpa, Puebla, Mexico. *Latin American Antiquity* 9(4):287-309.
 2018 *Cholula*. Fondo de Cultura Económica, Mexico City.

Matos Moctezuma, Eduardo

- 2002 Huehuetéotl-Xiuhtecuhtli en el centro de México. *Arqueología Mexicana* 56:58-63.

Murakami, Tatsuya, and Shigeru Kabata, eds.

- 2017 Informe técnico de la quinta temporada del Proyecto Arqueológico Tlalancateca, Puebla. Archive of Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico City.
 2019 Informe técnico de la séptima temporada del Proyecto Arqueológico Tlalancateca, Puebla. Archive of Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico City.

村上達也・福原弘識・ディエゴ＝マタダマス・嘉幡茂

- 2019 「酒と水と嵐の神の壺—形成期終末期トラランカレカにおける都市の発展と社会統合—」『古代アメリカ』22: 45-58。

Sugiyama, Saburo, and Rubén Cabrera Castro

- 2007 The Moon Pyramid Project and the Teotihuacan State Polity. A Brief Summary of the 1998–2004 Excavations. *Ancient Mesoamerica* 18(1):109-125.

原稿受領日 2019年8月16日

原稿採択決定日 2019年10月15日